

「もっと、おりましようね。」

また、はたおりをはじめました。

なにやらふしげで、おじいさんとおばあさんは、そつと、のぞいてみました。



すると、そこには、一わのつるが、  
自分のはねをぬいて、それをはたにおりこんでいます。

それで、すばらしいおりものができています。

「おお、いつぞやのつるだつ。」

思わず、おじいさんがさけぶと、

コー、コー

と、つるはないて、山のほうへとんでいきました。

あとには、花かんざしが一つ、

ぼろりと、おちているだけでした。

しばらくいくと、ふきつさらしの  
のはらの中に、おじぞうさんが六つ、  
雪をかむって、さむそうに立っています。

「あれあれ、おさむいことでしよう。」

じいさんは、頭の雪をはらって、

すげがさを、一つつかぶせてあげました。

でも、一つ足りません。

一つは、じいさんが、かぶっています。

「そうそう、そうでした。」

と、かぶっていたかさをとつて、六つ目の  
おじぞうさんにかぶせてあげました。そして、自分は  
手ぬぐいをかぶって、急いでかえっていきました。  
うちにかえると、じいさんはすまなそうに

ばあさんにいました。

「糸は売れんでのう、すげがさ六つととつかえたが、  
かえりに、おじぞうさんがさむそうに  
立つておらつしたから、雪よけにかぶせて  
あげてしもうた。だから、なにもない。」

話を聞いて、ばあさんは  
にこにこして、いました。

「それは、よいことなさつたのう。○

糸はまた、つむげばいいし、  
かさもやくに立ちました。」

そのばん、二人はさゆをのんでねました。



大きなくまが、のっしのっしと  
出てきて、いました。

「きんたろう、どつちが強いか、  
しようぶしよう。」

「いいとも、まけないぞ。」  
はつけよい のこつた！

くまは、うんうんうなつて、  
きんたろうをおしました。

くまをもちあげると、  
きんたろうは、うでに力をこめて、

「えいやあつ！」  
と、なげとばしました。

「まいつた、まいつた。  
山で一番強いのは、

きんたろうだ。」

くまが、いました。  
すもうがおわると、

おなかが、ペコペこ。

きんたろうのお母さんおもさんが作った  
おむすびを、みんなでたべました。  
きんたろうは、どうぶつたちと、  
いつもいっしょです。

かけっこは、足あしのはやいしかに  
おしえてもらいました。

木のぼりは、さるが、先生せんせいです。

きのこや、いもや、くりなど、  
山やまのたべものも、どうぶつたちと  
いっしょにとりました。

心こころのやさしいきんたろうは、  
どうぶつたちの人気にんきものでした。





「おお、もつたいない……。」

おじいさんは、よくばりじいさんから、うすをもやしたことを聞くと、かまどの中のはいをあつめて、家にもつてかえりました。

おじいさんは、うすのはいを、

にわにおきました。

そのとき、風がふいて、はいがそばの

かれ木にかかりました。

すると、かれ木に、ぱつと、花がさきました。

「あれれっ。これはふしきだ。」

おじいさんとおばあさんは、

びっくりしました。

おじいさんは、ほかのかれ木にも、

花をさかせることにしました。

おじいさんが、はいをもつて、かれ木にのぼると、とのさまが、とおりかかりました。

「これ。おまえは、なにをしているのじや。さかせようと、しているのです。」

「ほんとうか。では、さかせてみよ。」

「かれ木に花をさかせましょう。」

「かれ木に花をさかせましょう。」

おじいさんが、はいをまくと、

かれ木に、ぱつと、花がさきました。

「みごとじや。みごとじや。」

かれ木にさいた花を見て、

とのさまは、よろこびました。

とのさまは、おじいさんに、たくさんのはうびをあたえました。

ある日のこと、おひめさまは、

「日本<sup>にっぽん</sup>」のおむこさんが、見つかりますように。」

と、かみさまにおねがいに出かけました。

いつすんぼうしも、おひめさまのおともを

しました。

おひめさまは、ねっしんにおまいりました。

そして、いつすんぼうしや、おとものけらいたちと、

かえろうとすると、

「そここのうつくしいむすめ！ わしのよめになれ！」

とつぜん、大きな声<sup>おとこゑ</sup>をあげて、おにが、

あらわれました。

「たすけてえ！」

おには、おひめさまを、つれてていこうとしました。

おにには、おひめさまを、つれていこうとしました。

「おには、おひめさまは、はりの刀で、

いつすんぼうしは、はりの刀で、

おにの口の中を、力いっぱい、さしました。

おには、いつすんぼうしを口からはきだすと、

おひめさまは、にげまわりました。

いつすんぼうしは、おにの前にとびだしました。

「さて、おひめさまはわたさないぞ。

いつすんぼうしがいてだ！」

「おまえなど、ふみつぶしてやるわ。」

おには、いつすんぼうしを大きな足<sup>おと</sup>で、

ふみつぶそうとしました。

「えいっ！」

いつすんぼうしは、はりの刀<sup>かたな</sup>で、

おにの足<sup>あし</sup>のうらを、力いっぱい、さしました。

「いててて！ おまえなどくつてやるわ。」

おには、いつすんぼうしをつかまえると、

口<sup>くち</sup>の中<sup>なか</sup>になげこみました。

「えいっ！ エいっ！」

いつすんぼうしは、はりの刀<sup>かたな</sup>で、

おにの口の中<sup>なか</sup>を、力いっぱい、さしました。

「いててて！ おまえなど、ふきとばしてやるわ。」

おには、いつすんぼうしを口<sup>くち</sup>からはきだすと、

いきをすいこみました。

「えいっ！ エいっ！」

いつすんぼうしは、はりの刀<sup>かたな</sup>で、

おにのはなのさきを、力いっぱい、さしました。

「いててて！ まいつた、まいつた。」



うつくしいかぐやひめの

うわさは、みかどの耳にも  
とどきました。

「せひ、あつて  
みたいものだ。」

かぐやひめの家を

たずねた、みかどは、

かぐやひめの  
うつくしさに

おどろきました。

かぐやひめは、みかどに  
だいじにされて、

しあわせな日をすごしました。

「どうしたのじや、かぐやひめ。」

おじいさんとおばあさんは、  
わけをたずねました。でも、いつも、

かぐやひめは、わけを  
話してくれませんでした。



それから、三年ほどすぎて——。

かぐやひめは、月を見ては、なみだを  
ながして、かなしみにしずむことが多く  
なりました。

あしたが十五夜という日、  
かぐやひめは、  
おじいさんとおばあさんに、  
わけを話しました。

「わたしは、ほんとうは  
月のみやこのものです。  
あした、月のみやこに  
かえらなくてはなりません。  
おじいさん、おばあさんと  
おわかれするのが、かなしくて、  
ないていたのでござります。」

おどろいたおじいさんとおばあさんは、  
みかどに、月からのむかえがきても、  
かぐやひめが、かえれないように  
家をまもつてくださいと、たのみました。  
みかどは、たくさんのからいを出して、  
家をまもらせました。